

東京大学は、国外の著名な大学・研究機関において、本学の優れた研究成果を発表するとともに、相手方大学等との研究交流を通じて本学の国際的プレゼンスを高めることを目的に、平成12年（2000年）より、UTフォーラム（University of Tokyo Forum）を開催してきている。過去には、アメリカ合衆国（ボストン、シリコンバレー）、シンガポール、スウェーデン、中華人民共和国で開催し成功を収めている。

6回目となる今回のUTフォーラムは、平成19年（2007年）6月25日（月）、26日（火）の両日、大韓民国ソウル大学校、高麗大学校において開催された。

ソウル大学校においては、「人文学系」および「電気・工

学系」の2分野のフォーラムが開催され、それぞれ約120名、及び150名の参加があった。さらに、高麗大学校においては、「教育学系」のフォーラムが開催され、約150名の参加があった。また、両大学において、3分野の学生のフォーラムも並行して開催され、教員フォーラム、学生フォーラムともに成功裏に終了した。なお、本学からは、小宮山宏総長、浅島誠理事・副学長、武内和彦国際連携本部長のほか、学内10部局から21名の教員および37名の学生がフォーラムに参加し、ソウル大学校、高麗大学校の教員・学生と学術的、人的交流を深めた。

UT Forum in



6月25日（月）・26日（火）の2日間、韓国・ソウルにて第6回UTフォーラムが開催されました。今回の会場はソウル大学校と高麗大学校の2大学。この第2特集では、両大学校総長と本学・小宮山宏総長との対談も含め、UTフォーラム2日間の内容を報告します。

【電気・工学系フォーラム】

UT-SNU Forum: "Electrical Engineering and Electronics for Quality Life and Society"

安全で安心して暮らせる質の高い21世紀社会の実現のために、本学・電気系では、21世紀COEプログラムにおいて、システム、デバイス、マテリアルの各技術領域を跨いだシステムエレクトロニクスプロジェクト、ナノエレクトロニクスプロジェクトを立ち上げ、研究・教育を行ってきた。

この社会と生活の安全・安心を実現する「セキュアライフエレクトロニクス」のコンセプトをテーマに、工学系（電気系）フォーラムが6月

25日（月）に、ソウル大学校工学部ホールで150名以上の参加者を得て開催された。小宮山宏本学総長とLee Jang-Mooソウル国立大学校総長の挨拶のあと、保立和夫本学大学院工学系副研究科長が本学の21世紀COEプログラムの後継として採択されたばかりのグローバルCOEプログラムの紹介を行い、以下のサブテーマについて本学とソウル大学校の教員6名ずつにより12件の発表が行われ、最後に、Sul Seung-Ki工学部副部長が閉会の挨拶を行った。

社会と生活を監視する「センサ・センシング技術」については、保立和夫教授、Park Namkyoo准教授、そのデータを伝送処理・判断する「情報伝送・処理技術」について、坂井修一教授、柴田直教授、Shin Heonshik教授、Shin Yeong Gil教授、その判断を生活と社会にフィードバックする「エネルギー・環境・アクチュエーション技術」について横山明彦教授、堀洋一教授、Moon Seung-II教授、Sul Seung-Ki教授、さらに

これら各要素、技術機能向上のための「デバイス・マテリアル技術」について、荒川泰彦教授、Lee ByoungHo教授がそれぞれ、最新技術についてわかりやすく解説を行った。このエレクトロニクス分野では、わが国と韓国は熾烈な開発競争を繰り広げており、その研究・教育においてトップクラスの両校が、将来の革新的な要素技術、システム技術の創出に向けた幅広い議論を行うことができたのは大いに有益であった。

ソウル大学校 概要



ソウル国立大学校は1946年に設立された大韓民国で最初の国立大学である。ソウル市内の蓮建・冠岳の2つのキャンパス内に文系・理系、また芸術にわたる幅広い分野の16の学部組織、7つの大学院および専門職大学院組織、2つの付属病院を有する。2007年現在、学部学生数は約14,000人、大学院生は約9,200人、教員は2,500人を擁する国内でもっとも卓越した大学の一つであり、また世界においても高い評価を得ている。

高麗大学校 概要



高麗大学校は、1905年普成専門学校として創立され、1946年に総合大学として設置された。ソウル特別市城北區に本部を置く大韓民国の私立大学の中で最も著名な大学の一つである。人文・社会科学から自然科学まで幅広い学問分野において、2007年現在、19の学部組織、18の大学院組織を有しており、学生数は約35,000人（うち大学院生9,000人）、教員数約4,000人を擁しており、世界の大学との交流も盛んに行われている。

Seoul



【教育学系フォーラム】

UT-KU Forum: "University Education in the midst of Globalization"

教育学系フォーラムは、「グローバル化の中の大学教育」をテーマに、6月26日（火）に高麗大学校百年記念館で開催された。小宮山宏本学総長と韓昇洲高麗大学校総長の挨拶の後、フォーラムの統一テーマのもとに、「グローバル化の中の大学」、「人文社会科学の未来」、「大学教育の展望」の3つのサブセッションを設けて、9つの発表を行い、最後に、総括的なパネルディスカッションを行った。本学からの発表者は、浅島誠本学理事・副学長と金子元久・木

畑洋一・小林雅之・佐藤健二・高橋和久の各教授、韓国側からは、尹在敏・崔官・韓龍震・李南昊の高麗大学校教授の他、高炳憲（聖公会大学）禹濟昌（木浦大学）の2教授である。

大学教育のグローバル化は、留学生・教員の交流・移動、教育内容、教育方法など多様な側面にわたっており、グローバル化の中の大学教育の再構築は、国際的に共通の課題である。特に、教授言語、教育方法、人文社会科学や教養教育のあり方について、多くの共通の課題が提起さ

れた。同じような状況におかれた日本と韓国の大学が、共通の問題を相互に検討し、意見を交換したことは多大な意義を有していると言えよう。また、グローバル化を単に大学教育の危機と捉えるのではなく、積極的なチャンスと考えるべきか否かとのグローバル化に対する大学教育の方向性という根本的な問題をめぐっても議論がなされた。

フォーラムには、約150名が参加し、それぞれの発表やコメントに対してフロアも含めて、活発な意見交換が行われた。最後に、浅島誠本学理事・副学長と高麗大学校の沈光淑副総長が閉会の挨拶を行い、今後の日韓のさらなる大学交流を約して幕を閉じた。

【人文学系フォーラム】

UT-SNU Forum: "Future Directions in the Humanities"

6月25日（月）、ソウル大学校ホアム・コンベンション・ホールを会場にして、「人文学の可能性—その方法と実践」を主題とするUT-SNUフォーラム2007人文学系セッションが開催された。フォーラムは、東京大学教員が研究発表を行い、ソウル大学校教員がコメントをつけ、会場参加者と討論を行うという形式で進められた。

フォーラムは午前9時、武内和彦本学国際連携本部長による趣旨説明を受けて、李泰鎮ソウル大学校人文大学学長（人文学部長）が歓迎の辞を述べて開始された。発表者と発表テーマおよびコメンテーターは以下のようなものである。

- ①安藤宏（人文社会系）「近代小説の要件—小説の演技性」：権寧珉（人文大）
- ②柴田元幸（人文社会系）「『世界文学』は可能か」：朴性昌（人文大）
- ③羽田正（東洋文化研究所）「『イスラム世界』の見解と新しい世界史」：李恩廷（人文大）
- ④柴宣弘（総合文化）「地域史を求めて—バルカンの事例から」：安秉稷（人文大）
- ⑤渡辺浩（法學政治学）「『文明開化』と『天道』」：琴章泰（人文大）
- ⑥一ノ瀬正樹（人文社会系）「個人と人格との相克—刑事責任に見る近代の自律的人間観の陥穽とその脱却—」：金度均（法科大）

フォーラムは午後4時半、宋虎根ソウル大学校対外協力本部長による全体を概観しての感想の辞と小宮山宏本学総長の閉会の辞によって終了した。夏休み中にもかかわらず、人文大学（人文学部）の教員・大学院生を中心として多くの参加者があり、日韓人文学共通の問題をめぐって熱心な発表・討論が行われた。

[総長対談 in Seoul 1]

東アジアに 学術の架け橋を

本学・小宮山宏総長とソウル大学校・李長茂総長の対談は、
UTフォーラム2日目の6月26日、ソウル大学校にて行なわれました。
ともに工学出身の両総長の対話には、
「世界に貢献できる大学を創っていこう」という
大学人としての思いが鮮明に表れています。

“私は総長就任以来、
「開放と融和」の精神の重要性を
繰り返し強調してきました”

“私は「大学は、未来を作る
シンクタンク付きの広場である」
と考えています”



ソウル大学校総長
李長茂

東京大学総長
小宮山宏

李 はじめに、昨年、朝鮮王朝実録五大山本が東京大学からソウル大学校へ返却された件に関して、小宮山総長に感謝の意を申し上げると同時に、実録は朝鮮王朝王室の文庫である奎章閣で大切に保管している旨をご報告したいと思います。

小宮山 集中した議論の結果、私たちもあれが最も自然な解決方法だとの結論に達しました。いろいろと政治的な動きが出てくることも懸念され、スピードが最も重要な問題でしたが、速やかに受け入れていただいたので私どもとしましても非常に感謝しております。私はあの出来事は東京大学とソウル大学校が人と人との具体的な関係を含めて、非常に良い関係を持っていたことによって得られたひとつの結果だと思っています。

グローバル化時代における大学の機能と役割

小宮山 ところで、李総長はグローバル化時代の大学のあり方についてどうお考えですか？ 私の意見を先に申しますと……グローバル化時代とはいえ、私は「大学は主に企業のための人材を育てている」とは考えていません。むしろ、これからは「大学から未来の社会に向けた提案」をしていく姿勢が求められます。グローバル化以外にも社会には多くの問題があります。例えば今回、ソウル大学校で催された第1回ユニバーシティ・プレジデント・フォーラムで私がお話したのはサステナビリティ学という学問についてです。21世紀は人類の持続性が問われていて、環境の問題、エネルギーの問題、高齢化社会の問題など様々な問題に対してどのような社会システムを作っていくのかという答えが求められています。この種の問題は人類がいままで経験してこなかったことであり、これらの重要な課題にこそ様々な分野の知を持つ人たちが協力

し合い、解決のシステムを提案することが求められます。それは大学にしか出来ない、大学が担うべき課題であると考えています。

李 大学は本来、真理の探究を目的とする純粋学問の共同体としてスタートしましたが、産業・情報社会の21世紀を迎え、社会や国家に貢献できる能力に関心を向けるようになりました。その結果、大学は産業面での人材、国家が必要とする人材を養成することにさらなる関心を向け、学生らは先端科学技術、応用科学、職業選択などにばかり過度な関心を持つようになりました。しかし最近の世界的な流れはただ実益的な学問を学んで来た学生よりも、しっかりと基本を学び、それを土台に次々と変化していく社会に応用できる人材を求めるように変化しています。特に、国際化が進むにつれて生じた競争の激化、技術・産業中心の社会が持つ弊害のためにも、他者への寛大な心、共に生きるといった観点からもう一度人文科学系ルネッサンスの時代が到来すべきだという主張があります。先ほど小宮山総長がおっしゃられたサステナビリティ、持続可能な社会を我々が維持するためにも自然科学と人文科学が互に行き交い、理解し合う方向に世界は向かわなければならないと思います。



小宮山 さらに付け加えますと、グローバル化が世界を単調にすることが決してあってはならない。つまり、同じようなルールで、同じような価値観で、みんなが同じように生きていくような状況を生み出すことは避けなければならないと考えています。例えば、「企業は

目指していくような社会はとてつまらないものになってしまう。全員がお金を求めて、英語を話し、同じものを食べて、などということになればコミュニケーションをする意味すらもなくなってしまいます。これでは望ましいグローバル化とは言えない、そういうグローバル化にしてはならないと考えています。そのような状況が生じつつあるときにこそ、自分たちが自分たちの国の人材を育てるということの意味が大きくなっていくのであって、グローバル化ということは「世界で通用する人材を育てる」ということ、「自分の国を愛する」ということ、さらには「地域などのさまざまな領域を愛する人たちを育てる」ことだと思っています。具体的には李総長が今おっしゃられたことになるのではないかと思います。

李 小宮山総長のご意見に全面的に共感します。世界化とはそれぞれが行うものでなく、共に進む世界化でなければなりません。まずは「アジアの同質性」を基本とし、学問と文化の交流を通して同質性を確保していく「アジアを出発点とした国際化」から、さらに、もう一步世界へと向かわなければなりません。そのときに国際化のキーワードはダイバーシティ、つまり、「多様性」だと言えます。異文化、異なる知識・人・思想が出会い、新たな想像力と創意力が加味され新しいものを創造していく。そのためにも国際化は非常に重要です。現在、ソウル大学校には約2,000名の外国人留学生が在籍しており、一方ソウル大学校の学生も東京大学をはじめとする多くの大学で交換留学生として学んでいます。このように異文化学習から新たな知識と文化が生まれ、異文化とそこに暮らす人々に出会い、理解することで我々の言う寛容、他人を理解する精神も生まれます。したがって、その意味でも国際化は非常に重要であると考えています。



小宮山 同感です。私は、ダイバーシティには3つの重要な要素があると考えています。一つは「自然の多様性」、ナチュラル・ダイバーシティ、もう一つはよく言われていますが「種の多様性」、スピーシーズ・ダイバーシティ、そして、最も重要なのは先生が今おっしゃられた「文化の多様性」、カルチュラル・ダイバーシティだと思います。もちろん、すべての要素が大事ですが。文化の多様性とはとても重要なキーワードだと思います。

現在、両大学が取り組んでいること

小宮山 私は総長に選ばれたときに一年間かけてアクション・プランを作り、やりたいことを全てリストアップしましたが、130項目ぐらいありました。130項目では多すぎるので、やりたいことを一つだけ教えてくださいといわれても困るのですが、もし、どうしても一つだけというならば「知の構造化」だと思います。人間の知識というのはアリストテレスの時代から延々と増え続けていて、20世紀中には知識の総量が1,000倍から10,000倍にまで増えています。そのために学術の領域が細分化してしまっただけで、今われわれが話しているグローバル化の中で解決しなければならない問題は非常に複雑で大きな問題になってしまっています。エネルギーの問題、貧困の問題、高齢化の問題など、非常に複雑かつ大規模な問題です。この間のギャップを埋めるためには細分化されてきた知識を統合する方法が必要です。そういった意味における「統合」というものを一つでもいいから実現してみたい

と考えています。その一つがサステナビリティ学です。その他にも加齢学（ジェロントロジー）や共生のための哲学などいくつかのプロジェクトを総長室が支援しながら立ち上げていますが、いずれも今申し上げました「細分化された知」を社会のために統合するという試みの一つです。

李 小宮山総長のお話に同感です。大学といってもいろいろあり、いわゆる基礎教育の強化、柔軟性の確保、自立性、国際化などの課題がありますが、つきつめると「創造的な環境や雰囲気」、「社会が未来に発展していく上での方向性」が大学教育に反映されることが重要だと思います。そのためには大学が心を開き、革新的な変化を遂げなければなりません。私は総長に就任して以来、革新的な雰囲気や開放のために「開放と融和」の精神の重要性をくりかえし強調してきました。学問同士が互いの壁を越えて相通じ、異質なものが会った時に創造的な結果が生まれるために、まずは「開放と融和」の雰囲気が学内に満ちていることが重要という意味です。そして、学内から社会にも開放し貢献すること、さらに国際的にも開放し、海外の学者がこちらに来て教育したり学生が互いの国を行き来したりする、外国への「開放と融和」が重要であると考えています。「開放と融和」というのは大学だけの課題ではなく、社会のありかたにおいても必要なことだと思います。

小宮山 李総長とはお互いに考え方が非常に似ていると感じますね。やはり両校とも総合的なリーディング・ユニバーシティであるという特徴からもたらされる共通点なのだと思います。私は最近、「一言で言うならば、大学は『未来を作るシンクタンク付きの広場』である」と考えていますが、そういう意味で、これは先生がおっしゃられたコンセプトと同じかもしれません。

学科の壁に対する方策

李 大学の外部には「大学にはまだまだ『学科の壁』が存在する」と考えている方々も多く存在します。その問題を解決するために、私たちは「自由専攻制」を導入する計画です。これまでの「複数専攻」の他に、来年からは、例えば技術経営や情報文化、情報と文化と芸術などを連させた「連合専攻制」を施行することが決まっています。他にも別々の学科の教授が4人以上参加し連携した分野、例えば哲学と経済と心理などをまとめて一つの専攻とさせる「連携専攻」、自分の専攻以外の分野で指導教授の指導を受けながら自らが追究する新たな形の専攻を作っていく「学生設計専攻」も来年から施行する計画です。その他にも兼任教授の活性化は勿論、多様な学科の融合教科目も開発しています。20人ほどの学生が一つのクラスになって、小宮山総長が話された持続可能性、宗教と戦争など関連性のあるトピックを定めて一学期の間討論を行ない、1~2単位を修得する教育方針なども考えています。このように一般的な科目の中でも新しい知識を活用し、様々な分野の学生と教授が共に教養を学ぶ教育システムへと変えていくことが重要だと考えています。

小宮山 先ほども申し上げましたが、李総長とお話をしていて、非常に共通点が多く意見が合うと感じています。それは私も李総長も工学部の出身であるからだと思います。でも少し違うのは、李総長が機械工学出身で私が化学工学出身である点です。機械的な発想と化学的な発想には少し違いがあって、李総長のほうがよりシステムティックにお考えであり、今のお話などには非常に感銘を受けます。私たちの問題意識はやはり共通していて、「幅が広くても、奥行きのない人材を創っては意味がない」ということです。いかにして「深くて幅の広い思考を持った人材を創るか」が最大の課題であり、これ

について一所懸命に考えています。東京大学がやっていることはもう少し化学的だと思います。例えば、東京大学は1年生、2年生でリベラルアーツを履修するのですが、そこでは、専門の先生方が直接助けることにより、「リベラルアーツと最先端のサイエンスとをいかに接近させるか」というような試みをしています。それから、「学術俯瞰講義」というものを始めています。これは、学術全体を生命、物質、情報、社会、環境、哲学の6テーマに分け、名誉教授なども含めた講師陣により講義するというものです。前総長の佐々木先生や現総長の私などもそこに入って教えています。また、ソウル大学校ほどには実現しておりませんが、二人の教員が一人の生徒の指導教員になるという試みも行っていて、これは結構うまくいっています。二人の先生から学ぶことで生徒が学際的になれるということのほかに、先生が成長するということが起きます。そのほか、サステナビリティ学の修士課程では主専攻と副専攻のコースを作ることを始めています。いずれにしても機械工学の李総長が指導なさっているソウル大学校のほうが、今は全体をシステマティックに実現していると感心しました。とにかくこれは非常に難しい問題なので簡単な答えは無いと思います。おそらく、いろいろな大学がいろいろなチャレンジをするのだと思います。

人材選抜と共同研究の可能性

小宮山 こうして、ソウル大学校と東京大学が親交を深めていく先には、やはり、新たな共同研究の可能性が広がっているように思います。特に大学間に限定せず「国際的な親交を」と考えるならば、例えば、サッカーを一緒にやるだけでも仲良くなれるわけです。しかし、我々研究者の場合は、学術の分野で一緒に研究を行ない、そこで仲良くなっていくプログラムを進めるべきなのだと思います。最も現実的なのは……まず、先生同士が

共同研究を行い、さらに「東京大学の学生が1年間、東京大学で研究をし、次の年にはソウル大学校でカウンターパートの先生の下で研究をし、最後の1年を再び東京大学で研究をして博士号を取る」などの方法が考えられます。このようなプランがスピードもあり現実的な方法ではないかと考えていて、実はいろいろな大学と始めようと計画しています。ソウル大学校とも、ぜひ、このプログラムをスタートしたいと思っています。



李 大学は優秀な人材を育て、国家的知的財産を創出する責任があります。加えて新たな知識を創造する場でもあるので、ハードルを下げるということも重要かと思います。「成績が多少足りなくても社会・経済・地域的に不利な立場にある学生をどのように受け入れていくか」などは、社会に課せられた大学の責務だと考えています。政府は社会全体の安定性・公平性を考慮するため、高等教育の考え方において、大学と衝突することもあります。もちろん大学も偏った人材ばかりを選ぶのは誤りです。ソウル大学校では、地域均衡選考、農漁村特別選考、特技選考、特殊教育対象者選考などを通じ、多様な人材を様々な方法で育成しています。このように幅広い人材が入学できるよう、大学が社会に対し譲歩・妥協する姿勢も必要です。さらには、ソウル大学校と東京大学はそれぞれが東アジアを代表する大学の一つとして様々な交流の機会を持つことが共通した特徴であると言えます。小宮山総長がおっしゃられた教授の共同研究、学生の相互訪問などは大賛成です。のみならず、韓国、日本、中国は歴史的な文化のルーツもあり、儒教を含むアジアの文化・価値などを共に

議論することが必要だと思います。すでに東京大学、ソウル大学校、北京大学は毎年各大学で人文科学の学術大会を共同開催することにしました。その他にもビデオ・カンファレンスを導入し、1学期の間3大学の教授と学生が共同でアジア文化の講義を行う予定があります。東京大学、清華大学、ソウル大学校の工学部の学生を多数交流させる計画も発表されましたが、今後はこうした多様な計画を通じ互いに学ぶだけでなく、東アジアの価値を共有する方向へ進むべきだと考えています。最後になりましたが、大学改革を世界的にリードしている総長のお一人である小宮山総長がこうしてソウル大学校を訪問してくださったことに、心から感謝の意を申し上げますとともに、今後も両大学の友情が続くことを期待しています。

小宮山 ありがとうございます。李総長とは以前にも同じ時期に工学部長としてお互いに同じ立場で過ごしましたが、今回また同じ時期に総長という立場で改めてお会いできて大変光栄です。これを機に、共に東アジアを代表する大学として一層の交流、協力の実現にむけて歩みを進めたいと考えております。

平成19年6月26日ソウル大学校にて
(この記事は、通訳を介して、日本語と韓国語で行なわれた対談を日本語文に訳したものです)

李長茂 LEE Jang-Moo

1945年生まれ。67年ソウル大学校工科大学卒。75年アイオワ州立大学工学研究科博士課程修了。工学博士。76年ソウル大学校工科大学教授。97～2002年工科大学長。06年7月より第24代ソウル大学校総長。

小宮山宏 KOMIYAMA Hiroshi

1944年生まれ。67年東京大学工学部卒。72年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。81年工学部助教授。88年工学部教授。99～2000年評議員。00～02年大学院工学系研究科長。03年副学長。04年理事（副学長）。05年4月より第28代東京大学総長。

[総長対談 in Seoul 2]

日韓の 大学教育を語る

もうひとつの総長対談、本学・小宮山宏総長と
高麗大学校・韓昇洲総長の対談は6月25日に行なわれました。
お二人の対話は、大学基金、英語教育、入試制度と多岐にわたり、
教育者としての熱意あふれるひとときが育まれていました。

“そうですね。
学生の英語力向上から
得られるアドバンテージは
大きいと思います”

“大学の国際化を
考えた場合、
きわめて重要な課題は
英語教育ですね”

韓昇洲
高麗大学校総長



小宮山宏
東京大学総長

 **小宮山** このUTフォーラムは2000年に始まり、これまで1～2年に1回の割合で開催しています。第1回の開催地はマサチューセッツ工科大学でした。2回目はスタンフォード大学、第3回目がシンガポール国立大学、第4回目がスウェーデンの4大学、5回目である前回は北京で、北京大学・清華大学・中国科学院の協力を仰ぎ、行われました。このソウルで行なわれる第6回UTフォーラムの開催に向けて賜りましたご協力を深く感謝いたします。

 **韓** こちらこそ、このような非常に興味深い企画に参加させていただきましてありがとうございます。もう7年になるということですが、いままで、このUTフォーラムには学生と教員の双方が参加していたのでしょうか？

 **小宮山** このフォーラムは東京大学の国際化の促進を目的としていることから、その時々状況によっては学生も参加します。高麗大学校も同様かと思いますが、東京大学の教員・学生は多数の論文を専門誌や学術誌に掲載しています。つまり、学術的な面での国際化は進んでいると言えますが、その一方で、私たちは「東京大学の本質的な国際化」を促進する必要があります。そのためには人と人との具体的な交流や、その交流の実現に必要なネットワークを作ることが不可欠であるということから、「私たち自身が国際的な場にもっと身を置く必要がある」と考え、日本国外での定期的なシンポジウムの開催を企画したわけです。このようなことから、フォーラムには東京大学の教職員が必ず参加しています。また、ご質問のとおり学生の参加、あるいは主催によってシンポジウムを行う場合もあります。これまでの例では、シンガポールで4年前に開催したUTフォーラムがその後、シンガポール国立大学（NUS）との関係を深める大変有効なきっかけになったと考えています。私はシンガポー

ル政府の教育アドバイザーでもありますが、このような関係を作ることができたのもUTフォーラムの成果の1つと考えています。ところで、この2年ほどの間に我々の大学は貴校と交換留学生協定を結びましたが、その際、私は高麗大学校が大変美しいキャンパスをお持ちであることを知って、感銘を受けました。

韓 学内にいくつもの新しい建築物が建ちました。今では多くの大学が高麗大学校の施設を模倣したがつっていると聞きます。私も「デジタル・ライブラリーを備えた図書館など、学生のために作られているさまざまな施設は素晴らしいものだ」と思っていて、私自身、よく利用しています。私たちの大学では、理科系の学部がひとつのキャンパスに、そして、文科系の学部がもうひとつのキャンパスにあります。この2つのキャンパスは隣り合わせになっています。実は、この2キャンパスのバランスを取るのが難しいのですが。

大学基金の重要性

小宮山 現在、私たちもインフラの整備を進めています。たとえば、多数の外国人教授陣を抱えるためにゲストハウスを2棟建設する予定です。高麗大学校のシステムやインフラは非常に充実していると思います。

韓 私たちも海外留学生と教員のための建物を用意しました。東京大学の運営はすべて国の予算によって成り立っているのですか？

小宮山 3年前まではそうでした。現在は国立大学法人です。

韓 つまり、自分たちで資金を調達しなければならないということですか？

小宮山 政府から補助金を得ていま

すので、財政的な面での変化はそれほど急激ではありません。しかし、私が総長に就任したときには大学の基金が何もなく、基金を作ることが私の現在の大きな課題です。基金による収入というものは通常、利子や配当だと思いますが、高麗大学校の寄付と基金の収入の割合はどのような姿になっていますか？

韓 我々の基金は、キャッシュはあまり多くなく、不動産の形で持っています。しかし、我々には非常に熱心な同窓会組織があり、この組織に本当に助けられています。100周年記念のときには特に大きく貢献してくれまして、大きな寄付額を得ることができました。財閥タイプの大企業が寄付するのです。全体の比率は授業料の割合が50%。20%が寄付金、残り20%が研究基金から、後はその他の収入で運営しています。

小宮山 我々の場合は、寄付金の定義を同じ基準で考えた場合10%以下になると思います。この数字を増やす必要があります。それは私立化のためではなく、法人化のために必要になります。現在、それを進めています。

英語教育への取り組み

小宮山 言うまでもありませんが、



大学の国際化を考えた場合の極めて重要な課題が英語教育です。昨年私が貴校を訪れたときには、私たちとは異なる英語教育への取り組み方をしておられて非常に印象に残りました。当時の魚允大総長は私に「英語による授業の比率を30~50%程度にまで引き上げる計画だ」と話し

ておられましたが、現在ではどのような状況になっていますか？

韓 現状では30%以上の講義を英語で行っていて、学生に対しては英語で行われる講義を5クラス以上取ることを必須としています。また、教授の新規採用に関しても、英語での講義能力を前提に選定しています。魚允大元総長は、強引ながらも精力的な人物なので（笑）、このように、ある意味、困難な方針を押し進められたのだと思います。我々もこの方針を堅持し、数年内には英語による講義を50%以上にすることを目標にしています。一方では、例えば韓国文学や韓国文化に関わるものなど、あるいは日本文学の授業もそうですが、英語で講義を行うことに意味がない学科もあるというジレンマも生じています。そもそも、韓国文学を英語で教えられるような人材はなかなかいないものです。しかし、新しい教員の面接を私が行うときには、最初は韓国語で話し、しばらくして英語に切り替えるのですが、同僚になるかもしれない若い人々の中にはとても上手に英語を扱う方がいて、感心しています。もちろん、英語が唯一の国際的な外国語というわけではありませんが、現状では多くの言語を扱うことはできません。ご承知のように高麗大学校は韓国の他の多くの大学と違い、「韓国人により韓国資本で設立された大学」です。西洋化で先頭を走れた「米国の宣教師によって設立された大学」などのような、設立当初からの欧米とのコネクションは無かったのです。しかしながら、現在の私たちの大学の国際化の度合いは大変素晴らしいものがあると考えています。たとえば、今年の夏期講習には世界中から学生を募集しています。実際に韓国に来て講義を受けてもらうのですが、各国からの参加者が1,500人ほどいます。もちろん韓国内からも応募があります。また、教授陣も海外から多数招待しています。その多くは米国からですが、他の国からも招待します。こう



して、海外の教授と学生が韓国でお互いに教え、学ぶ機会を高麗大学校が提供することは、同時に、韓国の教授、学生、また、一般の人々にも交流の機会を与えることとなります。

小宮山 素晴らしい施策ですね。しかしながら、何ごとにもメリットとデメリットがあると私は考えています。20年ほど前に研究室のセミナーを英語で行った経験がありますが、議論自体が我々の英語力によって制限されてしまうと考え、半年で日本語に戻しました。広範囲でこのような状況が起こるのではないかと考えられます。つまり、教授陣と学生の双方の英語力の制限による弊害です。このような点を考えると、私には50%は高すぎるように感じます。韓国の学生のTOEFLの平均点が日本の学生よりも10%高いことは承知していますが、それでもやはりハンディキャップは少なくありません。この点に関してはどう思われますか？

韓 たしかにそうですね。学生たちの英語力を高めることから得られるアドバンテージは非常に大きいと思います。しかし、当然ながらロスも同時に起こります。学生たちが英語による講義を100%理解できるのであれば問題ありませんが、英語力の不足によって70%、80%しか理解できないのではないかとこの点は大きな懸念材料です。そこで、新しく採用した教授にはオリエンテーションを実施し、実際の講義の前にはリハーサルを行って、学生の前で講義を行うようにしています。特に、教授が韓国人で、クラスも全員韓国人であるような場合には英語での講義が難しくなります。何人か外国

人がいればまだいいのですが。おっしゃられるとおり、全体の35%から40%での実施が理想的なのかもしれません。実際には50%を達成するのは困難だと考えていますので、それほど心配はしなくても良くなりそうですが（笑）。通常の講義を英語で行うという方法以外に、新たにインターナショナル・カレッジを設立し、そこで英語と韓国語の両方であらゆる科目を学生たちに学ばせる、というアプローチを採っている大学もあります。たとえば……小宮山総長は化学工学がご専門ですが、つまりは日本語と英語の両方によって同じ化学工学の授業を行うという方法です。これも良い方法だと思いますが、講義や教員をすべて2倍にしなければならず、コストがかかりますね。少し無駄のようにも思いますが、学生にとっては良いかもしれません。

小宮山 今おっしゃられたことについて少しお話させていただきますと、私が専門にしている化学工学は20世紀初頭にマサチューセッツ工科大学で新しく開発された研究分野であるために、伝統的には英語で教えるのに非常に適していて、日本語にもほぼ完全に翻訳できました。しかし、化学工学はその後、日本やその他の国で広く、深く発展したために基本的なコンセプト自体から英語では表現しにくくなってしまった部分が生じたのです。たとえば英語と日本語の双方を完全に理解している人物でも、米国に無いコンセプトは英語に翻訳できません。言語的な相違が根本的な文化的相違に起因するという点が難しいのです。例えば、日本語には「もったいない」という表現があります。これは、「消費が必ずしもいいことではない」という考え方です。しかし市場経済のメカニズムの中では消費は悪いことではありません。それでも「もったいない」は日本文化にとって重要な表現なのです。グローバル化は不可避だと思いますし、良い影響もあると思います。しかし、このような文化的相

違の側面を考えないと、私たちの価値観そのものが均一化し、一元化するという問題を引き起こすと考えています。このようなことから、東京大学では最近、サステナビリティ学のコースを立ち上げました。修士課程で授業はすべて英語で行います。

両国の入学試験の違い

韓 入試制度は非常に重要なテーマですが、東京大学ではどのような入試制度を採っているのでしょうか？

小宮山 筆記試験を2回行いますが、そのうちの1回は全国で50万人の生徒が受ける「大学入試センター試験」です。その後、各大学で個別の試験の実施も可能なので、東京大学では2次試験を行い、この2次試験の結果とセンター試験の結果を合わせて合否を判定します。センター試験が「1」、2次試験が「4」という比率で点数を換算する方法をとっているため、相対的にセンター試験の比重は低くなります。

韓 高校の成績は考慮されますか？

小宮山 原則的には全く考慮されません。

韓 我が国では現在、この問題が非常に重要な問題として大きく扱われています。実は、明日、盧武鉉大統領が韓国国内の全大学の総長を集めて、この件に関する懇談会を開催します。入学試験と平準化の問題が議論されると思われます。今、わが国には、優秀な生徒を獲得することがもっとも重要か、あるいは、すべての生徒を受け入れて優秀な生徒として育てていくことがもっとも重要か、との論争があります。優秀な大学の出身者は、「優秀な生徒を獲得することが重要だ」との考えに疑問を持ちませんが、私は今、「どうして優秀な生徒が必要なのか」を

説明しなければなりません。今までは「あまりに自明なことだ」と考えていたのですが、ひょっとしたら、そうではないのかもしれません。

小宮山 しかし、もしも優秀な大学が優秀な生徒を採らなくなったらどうなるのでしょうか。「その生徒たちは外国の大学に出て行く」と思います。国際化が進んでいますから。我が国の政治家たちによる、また別の議論として、「東京大学の卒業生は東京大学の大学院に進めないようにしてはどうか」というものがあります。そうすれば大学が平等化されと考えているようです。われわれはこの政策に強く反対しました。完全には予想できませんが、結果は単純に、優秀な学生は海外に行くか、就職するか、他の大学に入って東京大学の院生になるかのいずれかになると思います。このような歪んだ結果が生まれ、最終的に日本の大学全体のレベルが落ちるように思います。このことで思い出すのは私の高校時代です。私が高校生の時に旧来の高校のシステムが崩壊したのです。私が卒業した公立高校からは毎年100人近くが東京大学に入学していました。最も優秀な、別の公立高校からは400人の卒業生中200人もが東京大学に入学していました。それに対してある政治家が不健全であるとして公立高校の平均化を進め、新しい制度を作りました。その結果、最も優秀な高校に行きたいと思う生徒も必ずしも希望通りに進学できなくなり、それぞれの高校に平均的に生徒が入学するようになりました。3年から5年ほどの間に優秀な公立高校のレベルはすべて下がり、最も優秀な公立高校からも東京大学へは1人か2人しか入学しなくなりました。このようにして公立高校のレベルの平均化と受験競争の緩和を狙ったのですが、実際には、私立高校に競争の舞台が移されていっただけなのです。学校数の少ない私立高校での競争はより激さを増していきました。この経験から「新しい教育制度に対

する社会の反応は得てして予想のできないものになる」ということが判ります。結果を予想することは非常に困難です。

韓 今、お話いただいた話とよく似た事例が韓国にもあり、「私教育」と呼ばれています。これは、塾や家庭教師などで行なわれる教育に関する深刻な問題です。進学率の高い優秀な公立高校がいくつかあったのですが、入学試験ではなく、学区を指定して抽選で生徒を無作為に入学させるように制度が変わったのです。その結果、いくつかの私立高校が大きく難易度を上げました。親が教育に投資して、塾や家庭教師などによる「私教育」によって私立高校に入学させるようになり、私立高校はさらに進学率を高めました。その結果、「高校の極集中化」が起きたのです。中くらいのランクに位置する高校の生徒は優秀である可能性がありますので、政府はこうした私立の高校に入りにくくすることで私教育のコストを削減できると考えはじめています。しかし問題は「その制度が施行された途端に親が大金を投じて今度は学校での成績を上げることに血眼になる」ということです。今まで以上に様々な塾や私的な授業が行なわれるようになると私は考えています。先ほどおっしゃったように、必ず予見しなかった抜け道ができ、結果を予測することは困難となります。ですから、教育制度に関してはあせらないで進めることが重要だと思います。

小宮山 その点に関して、日本政府が設立した「教育再生会議」では、大学の活動を改善する目的で、大学改革に関する議論を行っています。私もその一員になっています。ここでは他の委員から、さまざまな意見や提案が出されています。その1つがさきほど申し上げました学部と大学院の切り離しです。ここで私が主張しているのは「大学制度の評価は5年、10年単位で行うべきことである」ということです。たとえば、日本の国立大学は

すべて2004年から国立大学法人になりました。つまり3年前です。そしてその結果を6年間で評価すると約束しました。つまり今から3年後です。決して変化を強要するべきではなく、この6年間は何も変えるべきではないのです。変化を与えすぎると、優秀な大学への有益な改革を特に阻害してしまいます。教育制度の改革を評価するには十分な時間を与える必要があると考えています。

最後は大変シリアスなお話になりましたが……本日は有意義な対話をさせていただき、ありがとうございました。明日の大統領との懇談会の成功を期待しています(笑)。

韓 こちらこそ、ありがとうございました。お互いに幸運を祈りましょう(笑)。

平成19年6月25日ソウルプラザホテルにて
(この記事は英語で行なわれた対談を日本語文に翻訳したものです)



韓昇州 HAN Sung-Joo

1940年生まれ。62年ソウル大学校社会科学部外交学専攻卒業。70年カリフォルニア州立大学バークレー校政治学専攻博士課程修了。政治学博士。78年高麗大学校教授。93～94年韓国外務大臣。03～05年駐米韓国大使。07年3月より高麗大学校総長。

小宮山宏 KOMIYAMA Hiroshi

1944年生まれ。67年東京大学工学部卒業。72年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。81年工学部助教授。88年工学部教授。99～2000年評議員。00～02年大学院工学系研究科長。03年副学長。04年理事(副学長)。05年4月より第28代東京大学総長。



小林雅之

大学総合教育研究センター
教授



金愛花

大学院教育学研究科
博士課程2年

韓国の大学のシステムは日本とほぼ同一であるが、大学自体を「大学校（テハッキョ）」と呼び、学部や短期大学のことを「大学（テハク）」と呼ぶ（例えば、ソウル大学校人文大学）。大学校、短期大学以外にも、教育大学、産業大学、技術大学、放送通信大学、及び各種学校、遠隔大学の大学課程や各種学校、遠隔大学の専門大学課程など、様々な高等教育機関が存在する。

周知のとおり、韓国は異常と言うほど学歴を重視する社会風土があり、出身大学によって就職や出世が影響されることもあるため、大学校及び短期大学への進学が主流となっ

ている。その中でも、一般的にソウルを中心とする首都圏の大学が上位とされ、地方大学は軽視される傾向にある。国立大学として有名なのは、ソウル大学校（ソウルテハッキョ）、木浦大学校（モクポテハッキョ）などがあり、私立大学として有名なのは、延世大学校（ヨンセテハッキョ）、高麗大学校（コリョテハッキョ）、梨花女子大学校（イファヨジャテハッキョ）、成均館大学校（ソンギョングァンテハッキョ）などがある。

巨大な私立セクターと大学進学率

また、日本と同様に、大学が国公立セクターと私立セクターに分けられているが、大学数からしても、学生数からしても私立の割合が非常に大きい【図1、図2】。OECD各国の中でも、これだけ私立セクターが大きいのは、日本と韓国だけであり、両国の共通の特徴となっている。

1970年以降の高等教育への進学率を見てみると【図3】、1990年頃まで30%強だったが、1990年代半ばから急速に拡大し、現在で

は80%を超えており、世界各国のなかでも最も高くなっている。

激しい受験競争と入試改革

マーチン・トロウが提言しているユニヴァーサル・アクセス段階（進学率が50%を越え、誰でも高等教育を受けられる段階）に達しているにもかかわらず、韓国においてはいまだ受験競争が激しい。そのため、社会の大学入試への関心も高く、大学入試制度の改革が絶えず提起されてきた。1945年建国以来、大きな改革だけでも13回に及んでおり、細部にわたる部分的な手直しも加えると、その数は数十回にも及んでいる。2002年から続いている現行入試制度は「多様な選考資料による選抜」となっている。選抜方法としては、主に日本の大学入試センター試験に該当する「大学修学能力試験」（韓国では、修能（スヌン）と呼ばれている）の成績と高校の学校生活記録簿に基づいて志望校を選定する「定時募集」と、推薦入試やAO入試などに当たる「随時募集（スシモジブ）」とがある。ただし、「随時募集」の割合は少ないし、「定時募集」の入学査定において、大学修学能力試験が入学可否の決め手となることもあって、大学修学能力試験の試験日は国を挙げての行事のような風景になる。親はもちろん、後輩も試験場にきて応援している【写真】。入試日に受験生を安全に受験会場へ送り届けるためパトロールカーが動員され、またリスニング試験時の騒音対策として、航空機の離着陸が制限される場合もある。さらに、近年受験のストレスが原因で自殺を図る受験生も少なくない。

重い教育費負担

親は我が子がこのような激しい受験競争を勝ち抜くことができるようにするため、小さいときから高額な進学塾に通わせる。それだ

2007年韓国大学事情

テハッキョ 大学校を めぐる現実

UT
Forum
in
Seoul

国が違えば、大学のシステムも変わってくる。
ここでは、「UTフォーラムin Seoul」にちなんで、
隣国・韓国の大学事情を紹介したい。

■ 大学校(私立) ■ 専門大学(私立)
■ 大学校(国公立) ■ 専門大学(国公立)

図1 韓国の大学数推移

出典：教育人的資源部・韓国教育開発院 教育統計年報各年度版より

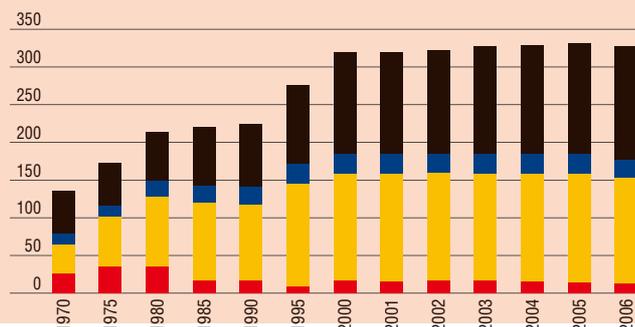
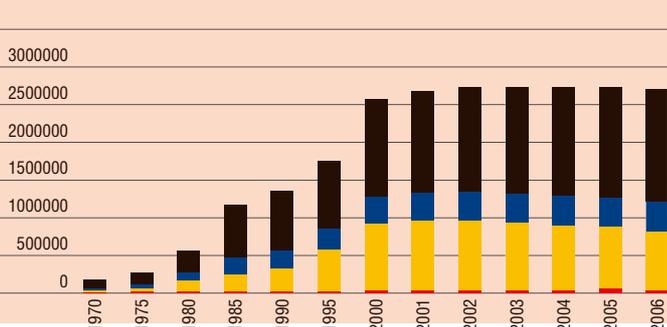


図2 韓国の大学学生数推移

出典：教育人的資源部・韓国教育開発院 教育統計年報各年度版より





試験場に入る先輩たちを応援している後輩たち



試験場の前で我が子の合格を拝む親

けでなく、大学に合格しても重い経済的負担をしなければならない。大学に入学すると、毎年高額の登録金を払わなければならないからである。登録金というのは、「入学金（入学時一回だけ）＋授業料＋既成会費」のことである。登録金は、大学によって若干違いはあるが、基本的に前述の3項目が入っている。近年、国立大学にしても、私立大学にしても、登録金を毎年値上げしているが、とりわけ国立大学の登録金の値上げが著しい。登録金は年々値上げするのもにもかかわらず、奨学金はそれほど多くなく、そのため、登録金は親の負担になってしまう。

韓国の場合、日本と同様に子供の授業料の負担はほとんど親がする。成均館大学校の調査（新入生720、在學生720、計1440人に対する調査）によると、親負担の學生が77.3%、学資金ローンが13.8%、アルバイトが2.3%、知人からの借金が0.8%である。2006年の年間家計所得が平均2780万ウォン（統計庁ホームページより）（1ウォンは約0.15円）であることを考えると、家計にとって子供の大学の登録金は非常に大きな負担になる（図4）。OECDの統計でも、教育費の親負担の割合は58%と日本の57%とほぼ等しく、他の国に比べてずば抜けて高くなっている（OECD Education at Glance 2004）。

大きい学歴別賃金差

このように親が重い教育費負担をしてまで、子供へ投資するのは冒頭でも述べたように、学歴によって就職や出世が大きく影響されるからである。大卒の初任年収は平均2400～2500万ウォン（企業規模別、職種別に違いが大きい）、短期大卒の初任年収は平均1900～2000万ウォンである（韓国大学新聞ホームページより）。高卒の場合、短大卒より200～300万ウォン低い。このように、学歴別賃金差が大きいことが、進学熱を支えている大きな要因となっている。

就職のための勉強

ここ10年以内の就職率は近年上昇傾向にあるものの7割以下となっており、大学を卒業しても、必ずしも就職できるわけではない。卒業後就職できるために、またより良い企業や職種に就くために、韓国の大学生が夏休みや冬休みにも休まず、大学図書館で就職のための語学勉強や資格勉強に集中しているところは、日本では見られない風景である。こうした語学勉強や資格勉強への投資も親のもう一つの大きな負担になっている。韓国の大学や学生生活は日本と共通している点も少なくないが、日本以上に厳しいものとなっている。



試験場の前で先輩の合格を拝む高校生

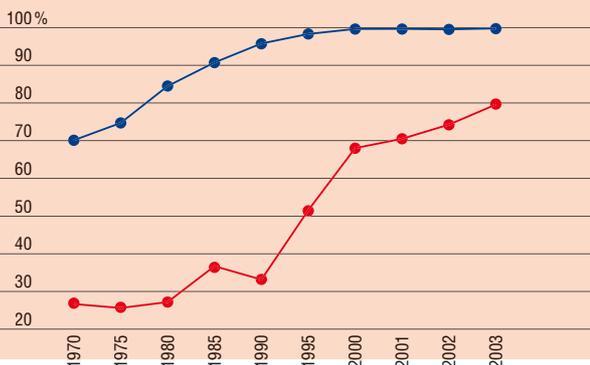


図3 高校及び高等教育の進学率

注：進学率＝（進学者数／卒業者数）×100（中学校から高校への進学率は1990年代初め頃から95%以上になっており、近年100%近い数字を維持していることを考えると、日本でいう進学率の意味とほぼ同じと考えられる）

出典：教育人的資源部・韓国教育開発院 教育統計年報 各年度版より

● 高校から高等教育
● 中学校から高校

図4 主要大学の在學生登録金総額比較

